

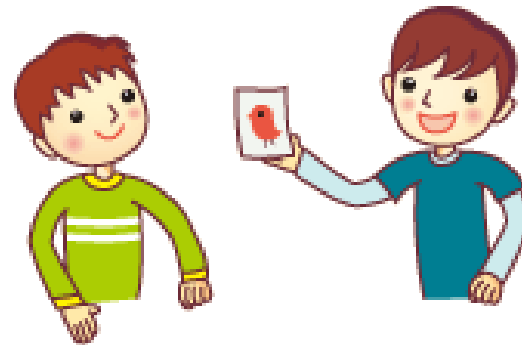
実践報告

特別支援学校中学部生徒に対する
活動場面における「報告」行動の
支援

指導目標

【令和2年度後期指導目標】

「できた」を教師に伝えることができる。



プロフィール・方法

【対象生徒】

肢体不自由がある

【指導場面】

- ① 朝の活動：連絡帳のシール貼りの活動が終わったときに報告する。
- ② 授業中：課題が終わったときに報告する。
- ③ 帰りの活動：翌日の当番カードを貼り替える活動が終わったときに報告する。

手続き

- 朝や帰りの準備ができた時，授業で課題が終了した時に教師に対して「できた」の報告をする設定とする。
- 「できた」を伝える場面になった時に，教師の声かけなしで伝えることができたらずくに称賛する。
- 伝えることが難しい場合は，教師から「で・・」とはじめの言葉を伝えて言うように促す。
- 1日3回以上，教師のはじめの言葉の促しなしで伝えることが3日間連続でできたら達成とする。

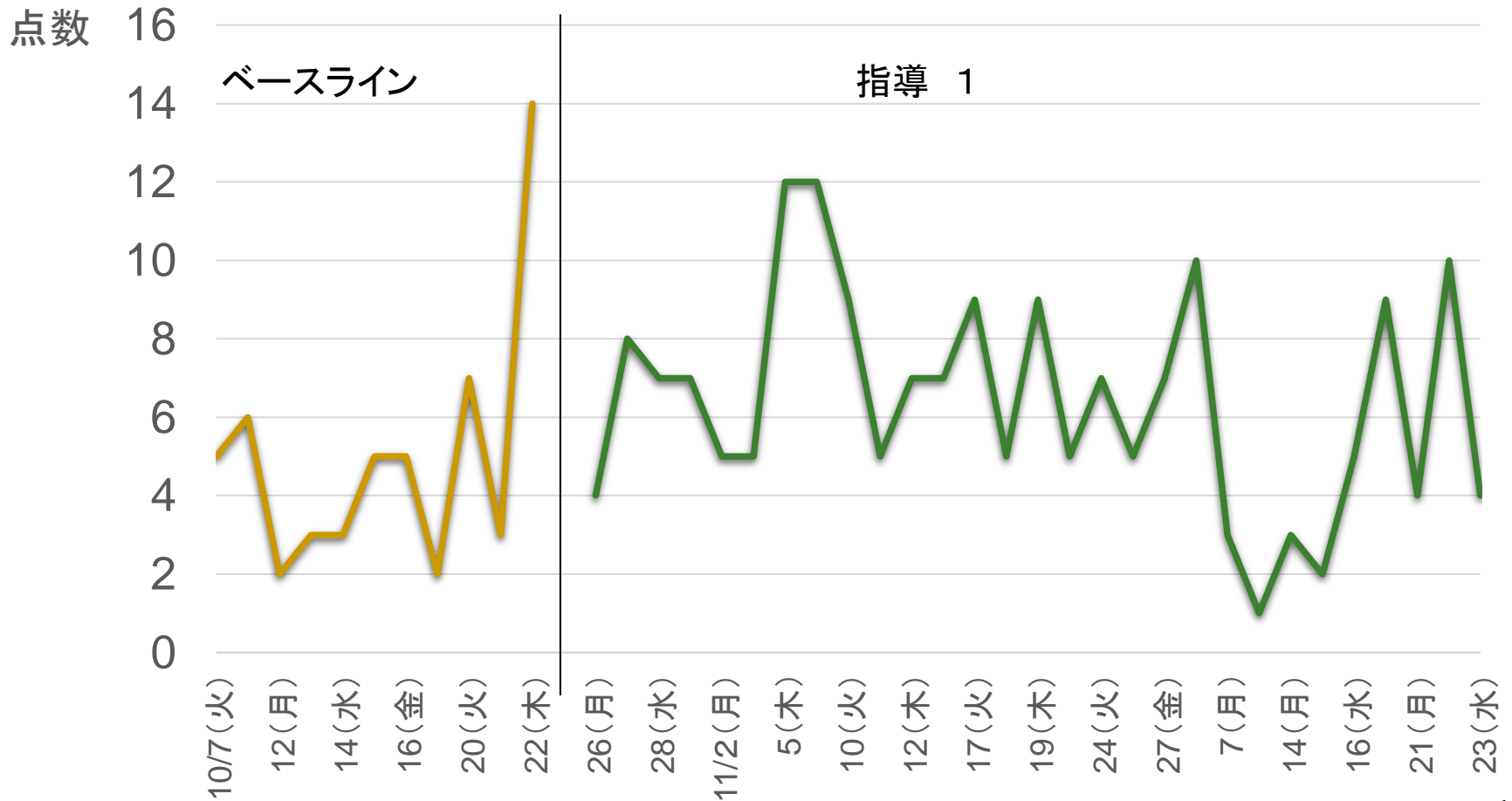
記録の仕方

・ 3つの活動場面で「できた」という回数を
得点化し、記録をとる。

- 3点 : 「できた」と言うことができる。
(教師のはじめの言葉の促しなし)
- △ 1点 : 教師の声かけ, 「で・・・」または
「でき・・・」で「きた」「た」と
言うことができる。
- × 0点 : 教師の促しでも難しい場合

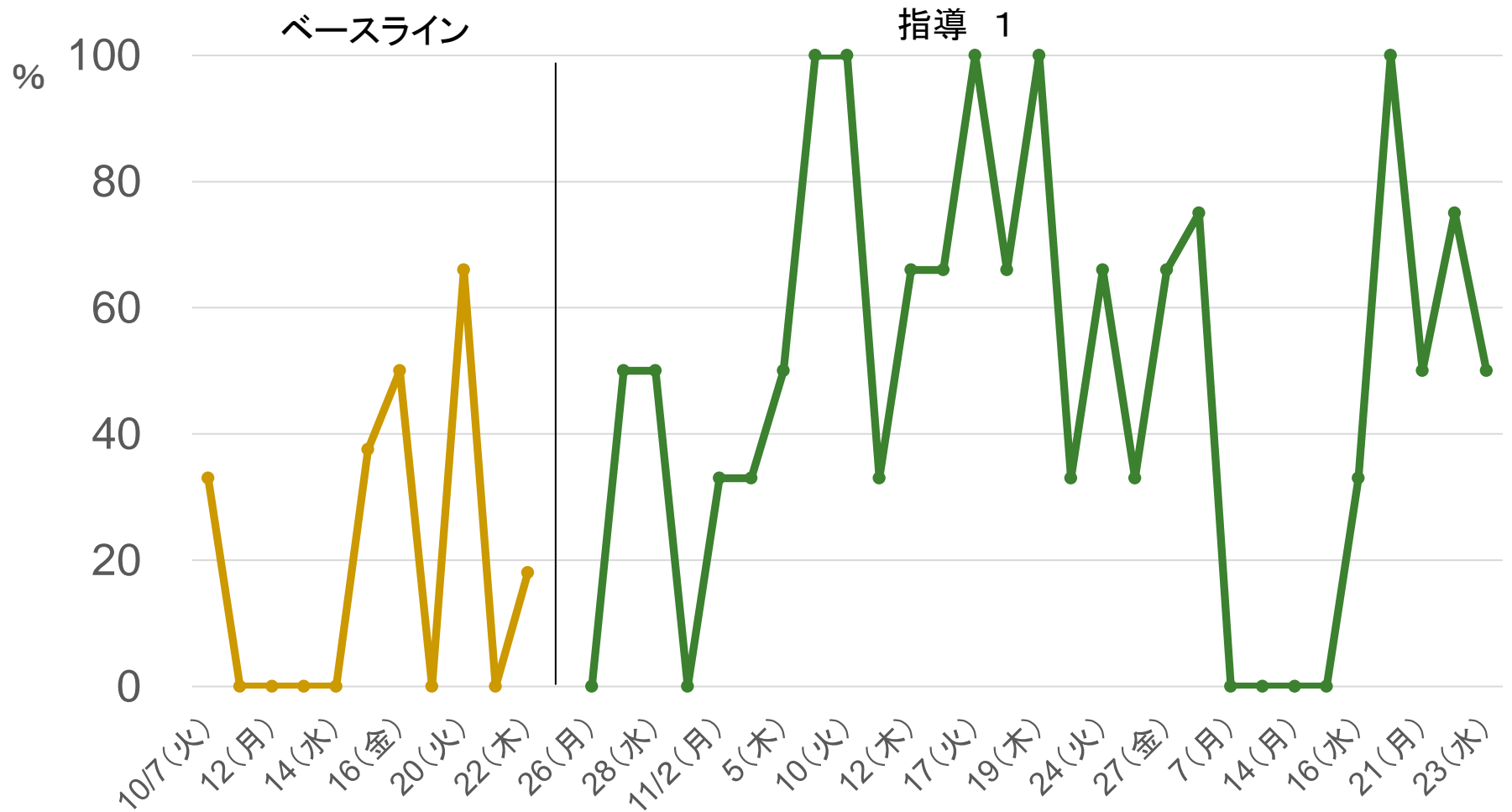
結果(1)「できた」の報告回数

【得点化で表したグラフ】



結果(1)「できた」の報告回数

【割合で表したグラフ】



結果(1)

- ❖ 指導開始時は目標に「できました」の台詞としていたが、アドバイス等により、生徒の実態を考慮して「できた」に台詞を変更した。
- ❖ 目標変更後からは、「できた」と自分で言う回数が増え始め、目標を達成することができた。
- ❖ 12月に入り、体調を崩し欠席が多くなった。登校時に「できた」の報告を促したが、発言が少なく、報告をすることは難しくなった。

考 察: グラフ化について

- ❖ 元々の報告場面の設定回数を定めていなかったため、教師による任意の場面設定の回数で得点が影響を受けた。
- ❖ 生徒の「できた」ということができたかの正確な成果を表すことができなかった。



適切な尺度（割合）で記録をグラフに表すことで、実施回数に左右されない本来の生徒の力をグラフで明確に示すことができた。